

【飯島周先生追悼文】

## ボガトウイリョフの戦中・戦後 ——プラハ学派とソ連のスラヴ学——

大平 陽一

### はじめに

なぜ飯島周先生の追悼シンポジウムでプラハ言語学サークルの話をするかと申せば、チャペックの翻訳者、研究者として広く知られる飯島先生とチェコとのつながりが生まれたのが、東大言語学科出身の先生がプラハ言語学サークルの言語理論に興味をもたれたからです。飯島先生が言語学科のご出身と聞いて、意外に思う方もいらっしゃるかも知れませんが、それに、チェコ語のようなマイナー言語で（私はマイナーという語に誇りを込めているつもりです）書かれた文学作品の翻訳を言語学者が手がけることは、そう珍しいことではありません。アンデルセン童話集の翻訳で知られる矢崎源九郎がそうですし、スラヴィストに目を転じて、プラハ学派の紹介に尽力された千野栄一先生もそうでしたし、我らが三谷恵子先生もすぐれた翻訳を出しておられます。

要するに、チェペックやサイフェルトを飯島先生の翻訳で読めることは、プラハ言語学サークルのおかげと言えるのかも知れないと、やや牽強付会気味に、今日はプラハ言語学サークルのメンバーだったピョートル・ボガティリョフ（1893–1971）について紹介させていただきます。

飯島先生が言語学者としてよりはチェペック、サイフェルトの翻訳者として著名なのと似て、ボガトウイリョフもロシア本国ではフォークロア研究者としてよりは、むしろハシェックの『兵士シュヴェイクの冒険』の翻訳者として知られています。ボガトウイリョフのロシア語訳は今にいたるまで版を重ね、電子書籍にもなっています。もう30年以上も前の1980年代末の数字になりますが、その時点で1600万部も出ていたそうですから大したものですね。

ただし、飯島先生とボガトウイリョフの近さをこじつけるもこれが限界です。いさぎよく諦めて、飯島先生とは無関係に、ソ連時代のスラヴ学、フォークロア研究、さらには記号論と関係づけて、チェコスロヴァキアからソ連に帰国してからの、つまり戦中・戦後のボガトウイリョフについてお話しいたします。

## 1. プラハ言語学サークルとボガトウィリョフ

まず、プラハ学派のことなど、お若い方はご存知ないでしょうから、百科事典の記述を一部引用します。執筆者は他ならぬ飯島先生です。

1926年マテジウス（1882—1945）が結成した学者集団を母体とする言語学派。1939年のナチス侵攻で活動を抑圧されるまでを古典期とし、チェコおよび周辺諸国の学者が定期的に会合、研究討論を重ね、機関誌『プラハ言語学団論集』および『言葉と文学』を発行、内外に影響を与えた。トルベツコイとヤコブソンの業績がとくに有名である。[…] この学派の基本的特色は、言語を機能的観点から構造的に分析するいわゆる機能主義であり、言語のもつ潜在的性質や言語外の現実との関係を重視するが、F・ド・ソシュールの学説などと並び構造言語学一派とされる。音韻論のほか言語の通時的、共時的様態の広範囲に及ぶ優れた研究があり、近来マテジウスとムカジョフスキーが高く評価され、言語学、文芸学の諸分野、とくに統語論、文体論で注目されている<sup>1</sup>。

残念ながらボガトウィリョフの名前は出てきません。そこで千野栄一先生が別の百科事典のために執筆した項目を読んでもみると、ここにはボガトウィリョフの名が出てきます。

1920年代にチェコスロヴァキアのプラハで興った構造主義の古典学派の一つで、言語学を中心に文芸理論とフォークロア研究の領域で華々しい活躍をした。[…] この学派の中心になったのはチェコ人のマテジウスとロシア人のヤコブソンで、このほかやや遅れてこの学派に加わったトルベツコイ、文芸理論で業績を残したムカジョフスキーやフォークロア研究でのボガトウィリョフらがいる。この学派の理論的先駆者はボードゥアン・ド・クルトネとソシュールで、前者の〈機能〉、後者の〈構造〉という概念を受け入れて、言語、文芸理論、フォークロア研究などの分野でこの二つの基本概念から分析を行い、今日でも依然として価値のある業績を残している<sup>2</sup>。

二つの引用文には「近来マテジウスとムカジョフスキーが高く評価され」、「今日でも依然として価値のある業績」とありますが、その「近来」も「今日」も遠い昔になってしまっています。しかし、プラハ学派の命脈がもう尽きてしまっているかと言えば、そうでもないようで、今年度から天理大学の非常勤講師をお願いした若いフランス語研究者の業績表に、「マテジウス」「テーマ」「レーマ」という単語が出ていてちょっと驚きました。ロシア科学アカデミー世界文学研究所のトポルコフ教授によれば、きよ

うご紹介するボガトウィリョフの仕事も、今なおそのアクチュアリティを失っていないとのことです。

さて、次にボガトウィリョフはどんな人物だったかを紹介したいのですが、たまたまや安易に『東欧を知る事典』から引用します。こちらの執筆者は桑野隆先生です。

ロシアの民族誌学者、フォークロア研究者。サラトフ生まれ。1921-40年はチェコスロヴァキア滞在。ヤコブソンとともに、モスクワ言語学サークルならびにプラハ言語学サークルの活動に主導的な役割を演じた。[…] 主著としては、ソシュールの影響下に言語学の共時的方法を民族誌に適用した『呪術、儀礼、俗信』(1929)、機能・構造主義を言語以外に適用した好例であり、また記号論の先駆として高く評価されている『モラヴィア・スロヴァキアの民俗衣装』(1937)、民衆演劇独特の豊かな世界をみごとに解読した『チェコ人・スロヴァキア人の民衆演劇』(1940)などがあげられる<sup>3</sup>。

文学理論家として著名なシクロフスキーは、『Zoo』という書簡体の小説を書いているのですが、そこに「ロマンがプラハに行き、ボガトウィリョフを呼び寄せた」という一文があります。実際、1920年に、正式国交のないチェコスロヴァキアと捕虜交換のために組織された赤十字使節団の通訳という身分で、まず言語学者のロマン・ヤコブソン(1896-1982)がプラハに赴任し、そのヤコブソンが、モスクワ大学時代からの親友ボガトウィリョフに就職口を斡旋したようで、21年に12月にボガトウィリョフも翻訳官・通訳官として赴任しています。この組織は、その後、ソヴィエト連邦全権代表部へと改組されます。

しかし、1920年代半ばから30年代終わりにかけて、プラハ言語学サークルのメンバーとして目覚ましい研究活動を行ったボガトウィリョフとヤコブソンの運命は、ナチスのチェコスロヴァキア侵攻によって引き裂かれます。1939年、ユダヤ系のヤコブソンはチェコからデンマークに逃れ、その後スカンジナビアを経てアメリカに移住し、ハーバード大学教授として世界的な名声を博したことは、ご存知の方も多いでしょう。一方、ボガトウィリョフは(『東欧を知る事典』の記述は間違いで)1940年ではなく39年にソ連に帰国しました。

## 2. 1920-30年代のソ連スラヴ学とスラヴィスト事件

ボガトウィリョフがチェコスロヴァキアに滞在していた1920年代から30年代終わりにかけて、ソ連のスラヴ学は崩壊に瀕していました。革命後のソ連では、スラヴ諸民族が共有する文章語が古代教会スラヴ語であったこと、その言語で書かれた文献のほとんどが宗教文書であったという事実から、スラヴ学を「反動的」と考える風潮が

強く、また 1950 年までソ連の言語学界を支配するマールのヤフェト理論は、スラヴ諸語が同系の言語であり、スラヴ祖語という共通の源をもつというそもそもの前提を否定していたからです。

こうした風潮の中、1933 年末から 34 年にかけて〈スラヴィスト事件〉が起こります。この事件の犠牲者のひとりが、ヤコブソンの斡旋でチェコスロヴァキア政府から助成金を得、ブルノで研究活動と就職活動をしていたロシアのスラヴィスト——モスクワ大学時代のボガトウイリョフとヤコブソンの恩師であった——ニコライ・ドゥルノヴォ（1876—1937）でした。ドゥルノヴォもプラハ言語学サークルの一員として精力的に活動し、何冊か著書を刊行したのですが、ついにチェコでは就職先が見つからず、1927 年にベラルーシ科学アカデミーの招聘をうけ、ソ連に帰国していました。しかし、二年ほどでベラルーシ・アカデミーの職を追われたドゥルノヴォは、国家保安部のでっち上げた〈スラヴィスト事件〉の首謀者として 33 年 12 月に逮捕され、収容所に送られました。

モロトフ人民委員会議長の暗殺計画に始まり、国外のロシア人ファシストとの結託やアカデミーの研究活動の妨害に至る荒唐無稽な罪状が並んでいる告訴状の最初のページには、次のように書かれていました。

反革命的組織《ロシア民族党》はニコライ・トゥルベツコイ公爵、ロマン・ヤコブソン、ピョートル・ボガトウイリョフらの主導する在外ファシストのセンターから直接指令を受けて設立された。この党が組織されたのは 1930 年の前半、ニコライ・ドゥルノヴォ教授のモスクワ帰還後のことである<sup>4</sup>。

実際にこの 4 人全員が所属した組織は、プラハ言語学サークルしかありません。4 人で撮った記念写真、トゥルベツコイたちの論文の抜刷も証拠として採用されました。スラヴィスト事件では、ドゥルノヴォ以外にも、セリシチェフやイリンスキー、その後、ソ連言語学界の一大権威となったヴィノグラードフも逮捕されました。34 人の逮捕者のうち、生きのびたのは 17 人だけです。

実は、ソ連の民族誌学者ゼレーニンに宛てた 1934 年 11 月 15 日付けの手紙の中でボガトウイリョフは、12 月のレニングラードでの学会には必ず出席すると、書き送っていました。しかし、この一時帰国は直前になって取りやめになりました。この時期にボガトウイリョフが帰国して、無事だったはずがありません。帰国を中止した理由をはっきりしませんが、34 年 5 月にはトゥルベツコイが「ドゥルノヴォと彼の息子について何か知らせはありますか。私の弟はトゥルケスタンに流されています。弟の娘（ドゥルノヴォの息子の妻）も同様です」と、ヤコブソンに宛てた手紙に書いていたくらいですから、危ないという程度の情報は、ボガトウイリョフにも届いたのかも

知れません。

しかし、ナチスに占領されたチェコスロヴァキアから帰国した1939年にしても、とても安全な状況とは言えませんでした。しかし、それでもボガトウィリョフが帰国したのは、妻子がモスクワにいたからです。全権代表部の職員だったタマーラ夫人と知り合い、結婚したのはプラハでしたし、一人息子が生まれたのもプラハでしたが、1928年、夫人は病気の祖母の見舞いのため、息子を伴って一時帰国しました。ところが、当局は二人の再出国を頑として認めず、ボガトウィリョフと妻子は十年以上も離ればなれだったのです。

ただ幸いなことに、スラヴ学をめぐる状況が一変していたお陰でボガトウィリョフは逮捕を免れ、翌1940年にはモスクワ大学教授のポストに就いています。第二次世界大戦勃発によって、反ファシズムのためのスラヴ諸民族の連帯が大義名分となったためでした。遅ればせながら、1943年にモスクワ大学にスラヴ学講座ができ、47年にはソ連科学アカデミーにスラヴ学研究所が創設されます。

モスクワ大学での教育・研究の傍ら、ボガトウィリョフは、タス通信でドイツ支配下のチェコスロヴァキアに向けたラジオ放送も担当していたそうです。革命後に始まったスラヴ学の軽視、1930年代のスラヴィストの弾圧の結果、ボガトウィリョフは40年代のロシアにおいてただ一人のチェコ文化の専門家になっていました。そんな状況ですから、モスクワ大学では専門の民族誌学以外にチェコ文学を専攻する大学院生も指導しましたし、大学外からも民族誌、演劇学、人形劇に関心をもつ人々が助言を求めて、アパートを訪れたそうです。根っからの善人で、無防備なぐらい他者の善意も信じていたボガトウィリョフは、その学識を惜しみなく後進に分け与えました。

『兵士シュヴェイクの冒険』を翻訳したお陰で手に入れることのできた狭い部屋への訪問者たちが求めていたのは、ボガトウィリョフの学識だけではありませんでした。当時のロシアにとって貴重な蔵書を借りるために、多くの人が訪れました。革命以後、長年におよぶスラヴ研究の空白期間が、そのままロシアの大学や図書館の蔵書の空白になっていたからです。若いスラヴィストたちにとって、ボガトウィリョフの蔵書は、まさに「救い」だったのでしょう。

### 3. ロシア科学アカデミー・民族誌学研究所からの追放

しかし、1947年末には、フォークロア研究者への弾圧が始まっていました。それは大々的に展開された〈反愛国的コスモポリタニズム批判〉の一環をなすものでした。1944年からボガトウィリョフは、ロシア科学アカデミー民族誌学研究所・フォークロア部の部長も兼務していたのですが、48年2月、同研究所において、当時のフォークロア研究の「欠点」について、非公開の討議が行われました。スケープゴートに選ばれたのは、『歴史史学』のヴェセロフスキー、『民話の形態論』のプロップ、そして

ボガトウィリョフでした。弾圧する側に言わせると、この三人の学説の根っこには反歴史主義が共通しており、彼らの研究上の誤りはそこに起因するとされました。批判された三人のコスモポリタンのうち、ただ一人ボガトウィリョフだけが討議に出席し、誠実な回答を試みました。しかし2月16日の討論では、ボガトウィリョフの機能・構造主義的方法を俎上に載せ、機能と構造の研究は弁証法的唯物論と矛盾するものではないというボガトウィリョフの主張に対し、マルクス・レーニン主義と矛盾対立するブルジョワ的民族誌学において、機能学派は広く流布しているのではないかと、討論への参加者のほとんどが批判したそうです。

その後、ソ連のフォークロア研究の欠点と課題に関する議論は、民族誌学研究所学術会議の公開討論会へと引き継がれ、ここでもボガトウィリョフは、マルクス・レーニン主義の諸原理といかなる共通性も持たない方法上の概念をフォークロア研究に援用したと、厳しく批判されました。

こうした対論者たちの批判に対して、ボガトウィリョフは自分の方法に欠点があることを認めながらも、それは「機能」という概念の不適切な援用によるものであったと、『機能』という用語は、まことにもって不適切であった。それは何か他の用語に、たぶん『役割』か『課題』という用語に置き換えるべきであった」と、あたかも問題になっているのが純粋に学問的な問題でしかないかのごとく、答えたのだそうです。ちなみにプラハ言語学サークルの流れを汲む言語学者のフランチシェク・ダネシュは、2008年の論文で、「機能を何らかの現象の『課題』『役割』であるとか『言語外現実へのレファレンス』といった理解」の仕方<sup>5</sup>がプラハ学派のメンバーには典型的であると書いているのですから、ボガトウィリョフの自己批判は、外来語を使ったのがまずかったと言っているに過ぎません。

スラヴィスト事件の際には、「民族党」の組織者と批判されたボガトウィリョフが、こんどは「コスモポリタン」として糾弾されたのですが、ロシアの純朴な農民を思わせるボガトウィリョフほどコスモポリタンから遠い人はいないでしょう。冒頭で紹介したように、シクロフスキーの書簡体小説『Zoo』には、ボガトウィリョフとヤコブソンを対照的に描いた章があって、そこにこんな箇所があります。

ベルリンで三着背広を誂えたが、モスクワで仕立てた別の背広を着ていた<sup>6</sup>。

いつも氷砂糖をポケットにしるばせ、時々嚙っていた。ロシア的な習慣を守っていたのだ<sup>7</sup>。

ヨーロッパを愛するヤコブソンに連れられて、こぎれいなレストランに入ったボガトウィリョフは、いろいろな料理、ワイン、美女に囲まれているうちに泣き出す<sup>8</sup>。

結局、チェコで彼が落ちつけた場所は、コサックたちの暮らすロシア人捕虜収容所でした。

しかし、フォークロア研究の欠点についての討論会のあとすぐに、ボガトウィリョフは民族誌学研究所を追われます。さらに4年後の52年には、モスクワ大学も解雇されてしまうのですが、不幸中の幸いと言うべきか、お人柄というか、教え子のひとりがボロネジ大学に呼んでくれました。

しかし、これも「雪どけ」のお陰なのでしょうか、1958年にチェコ文学の専門家として科学アカデミー世界文学研究所の研究員としてモスクワに職を得ることができました。ただし、モスクワ大学に復職できるのは、6年後の1964年を俟たねばなりません。

すでにこの頃ともなると、ソ連でも構造主義が復興し、構造言語学の流れを汲む記号論が——その後世界の注目を集める記号論のタルトゥー＝モスクワ学派が——成立していました。彼ら60年代のソ連に現れた構造主義者たちが依って立つ「文化の記号的性格」という理念は、実は1920-30年代にボガトウィリョフが立脚していたものと基本的に同じであり、ボガトウィリョフやヤコブソン、ムカジョフスキーが機能構造主義言語学の方法をフォークロア研究や文学研究に応用したのと同様、タルトゥー学派の記号学者たちは、神話、フォークロア、芸術の研究に機能・構造主義的な方法を援用していました。

しかし、ボガトウィリョフは先例を示しただけではありません。60年代のソ連における構造主義と記号論の復興のプロセスに積極的に参与したのです。タルトゥー学派を主導したロトマンは、ボガトウィリョフについて次のように述べています。

ボガトウィリョフは記号論的研究の歴史の体現者であった。モスクワ言語学サークルとプラハ言語学サークルのメンバーだった彼は、1960年代初めから我が国で目立つようになった記号論的研究の発展を後押ししてくれた。62年には、モスクワで開催された記号システムの構造的研究に関するシンポジウムに参加してくれたし、その後もタルトゥーでの研究会の活動的なメンバーとなってくれた<sup>9</sup>。

60年代の半ばには、タブーだったはずの構造主義も半ば容認されてきたのでしょう、1967年には〈プログレス〉出版から550ページ以上もあるアンソロジー——この1冊でプラハ学派の言語論、標準語論、詩的言語論を概観できる——『プラハ言語学サークル』が上梓されました。70年代になると、日本語をはじめ多くの言語に訳されることになるウスペンスキーの『構成の詩学』(1970)など、芸術記号論の本がイスクーストウツァ〈芸術〉出版から始まります。こうした流れに乗るようにして、やはり

イスクーストゥヴァ  
〈芸術〉からボガトウィリョフの選集『民衆芸術理論の諸問題』（1971）が出版されました。この選集の中には、プラハ言語学サークル時代のモノグラフで全て日本語に訳されている——『チェコ人とスロヴァキア人の民衆演劇』、『ザカルパチエの呪術・儀礼・俗信』、『モラヴィア・スロヴァキア地方の民俗衣裳』と、8篇の論文が収められています。こうした構成からは、ソ連の読者に外国語で出版された仕事の紹介に重点を置きつつも、同時に帰国後にロシア語で書かれた論文にも触れてもらうことを意図していることがうかがえます。

『民衆芸術理論の諸問題』が出てすでに半世紀が経とうしているわけですが、世界文学研究所教授でフォークロア研究者のトポルコフが6年前に発表した論文によれば、1920年代、30年代に書かれたボガトウィリョフの論考は、現在もなおアクチュアリティを失っていないのだそうです。その評価を裏書きするように、2006年にも世界文学研究所の出版局から300ページ弱の論文集が刊行されます。その題名は『フォークロア研究の機能・構造的な方法』、かつてアカデミー民族誌学研究所から追放された時の理由とされた「機能・構造主義」が、およそ60年の時を経て、アカデミーの刊行物の表紙を飾ることになったのです<sup>10</sup>。

## おわりに

このように見てくると、プラハ言語学サークルが戦後のボガトウィリョフに災厄をもたらしたようにも思えなくもありませんが、ボグスラフ・ベネシュが言う通り、「1920年から38年までの時期は、ボガトウィリョフによってきわめて多産な時期であった」のはまちがいありませんし、多くの友人、知人たちの回想する彼の人物柄からして、プラハへの移住を後悔したことも、モスクワへの帰国を後悔したこともなさそうに思えるのですが、それは私の希望的観測なのかも知れません。

ボガトウィリョフは意志堅固な反体制知識人ではありませんでした。善良な田舎者、優れた学者だが弱虫という方が彼の人物像を的確に描写しているように思います。しかし、彼は民族誌学研究所で批判されても決して媚びることはありませんでした。いま私たちの国に起こっている学術会議をめぐる問題を考える時、インチキ研究者ではあっても、学術会議の問題の重要性は分かっているつもりの方は、自分と同じ田舎者で弱虫のボガトウィリョフを師表と仰ぐつもりでいます。

## 注

- 1 飯島周「プラハ学派」『日本大百科全書（ニッポニカ）』©Shogakukan Inc.
- 2 千野栄一「プラハ言語学派」『世界大百科事典』©Heibonsha Inc.
- 3 桑野隆「ボガトウィリョフ」萩原直監修、柴、直野、南塚、伊東編『新版・東欧を知る事



典』平凡社、2015年、511頁。

- 4 *Робинсон М.А. и Петровский Л.П.* Н.Н. Дурново и Н.С. Трубецкой: проблема евразийства в контексте «дела славистов» (по материалам ОГПУ – НКВД) // *Славяноведению* 1992. № 4. С. 74.
- 5 *František Daneš*, „Pražská škola: názorová univerzália a specifika,“ *Slovo a slovesnost* 69, nos. 1-2 (2008), p. 13.
- 6 *Шкловский В.Б.* «Зоо. письма не о любви, или третья Элоиза» // *Собрание сочинений. Том 2. Биография.* / отв. ред. И. Калигина. М., 2019. С. 209.
- 7 *Шкловский.* «Зоо». С. 208.
- 8 *Шкловский.* «Зоо». С. 209.
- 9 *Лотман Ю.М.* «Памяти Петра Григорьевича Богатырёва» // *Богатырёв П.Г.* Народная культура славян. М., 2007. С. 341-342.
- 10 翌2007年にもボガトウイリヨフの論集がモスクワで出版されている : *Богатырёв П.Г.* Народная культура славян. М., 2007.